

陶工、医者になる。

齋藤正憲

ウソかホントか知らないけれど、インド人は2ケタのかけ算が暗算でできるとか、できないとか。だからかどうかも定かでないが、理系にメチャメチャ強く、かのシリコン・バレーでも、インド人は幅を利かせているとか。人口もハチャメチャに多いから、将来性も存在感もありまくり。かねてより、「インド人もビックリ！」の世界に行ってみたくて、行ってみたら、「インド人にビックリ！」であった。ソコソコ海外経験はあるほうだとタカをくくっていたら、痛い目にあいました。とにもかくにも、どこもかしこも、ものすごい圧迫感。人当たりも激しいし、食事だって、どーにもこーにもコテコテで、お約束のように、食当りに……。帰国後、私の食生活におけるカレー占有率は著しく落ち込んだが、コレは断じて加齢のせいではない。はじめてのインドがあまりに強烈すぎて、大好きなカレーにまで拒否反応が出てしまったのだ。昼食のメニューに逡巡しても、カレーだけは避けてしまう自分にハタと気づき、「こりゃあ、もう、インドにゃあ、行かねえなあ……」と強く感じた。けれど、しばらくしたら、「また、行ってもいいかな」なあって思えてくる。「そんな自分にビックリ！」してしまった。コレがインドの魅力なのだろう。

いやいや、すみません、インドの話は前置きで、本題はバングラデシュです、バングラデシュ。バングラデシュ、ご存じだろうか？ インド人がひしめく、広大なインド亜大陸。その右の付け根に、ひっそりと位置しているのが、バングラデシュだ。四国ほどの面積に、日本を超えるひとびとがひしめいているもんだから、人口密度は世界屈指。ともかく、貧しい国で、だから、出稼ぎに出る人が多い。日本にだってたくさん出稼ぎに来ている。知ってました？ 最近、街でよくみかける、本格的カレー屋、アレ、インド人がやっているところもあるけれど、バングラデシュ人の店も少なくないんだとか。知らなかったでしょ？

そんなバングラデシュ、宗教はイスラームである。そう、バングラデシュはもともとインドの一部として独立したのだが、イスラームが多いということで、パキスタンとともに両パキスタンとして独立し、さらにその後、パキスタンのいぢめに嫌気がさして、2度目の独立を果たしたのだ。実際に訪ねてみても、あまりイスラーム感がしないところが、バングラデシュらしいところだが、レッキとしたイスラーム国家なのである。

だからというのもいささか短絡的だけれど、原理主義による凄惨なテロと、どーしても、無縁ではいられない。記憶に新しいのは、2016年7月1日に起こった、日本人7名を含む28名が犠牲となっ

陶工、医者になる。

たレストラン襲撃事件だろう。そもそも、バングラデシュは見所も少なく、インフラの整備も遅れているから、観光客が押し寄せるような国じゃない。だから、日本人はほとんど行かないのだが、そんなところにも、行く人は、行く。国際協力などの、仕事関連である。そんな献身的な方々が犠牲になってしまったのだから、イタタマレナイ。ご冥福を祈るばかりである。

なあーんて書くと、バングラデシュはとても物騒な国に思えるけれど、決して、そうではない。初代首相が暗殺されるという黒歴史も手伝って、どーしても、殺伐とした国民性が連想されてしまうけれど、サニ非ズ。温厚で、控え目なひとだって、たくさんいる。ある日のこと、農村を歩いていたら、幼い子どもが近づいてきた。可愛かったから、写真に収めようと、カメラを向けたら、ナ、ナント！ 恥ずかしがって、コソコソ、物陰に隠れてしまったのではないか。コレ、とても、レアだと思う。フツー、子どもなんて、好奇心のカタマリ。私の経験では、「カメラ、ないの？ あるんでしょ？ 写してよ！」という子どものほうが圧倒的多数派である。バングラデシュの子どもの、なんとスレていないことか。これは国民性なのだと思う。習慣の違いもあるだろうが、チップを要求されることもほとんどなく、個人的見解だが、エジプト人に爪のアカを煎じて飲ませてやりたいくらい。いやいや、エジプト人をディスっているわけではありません。バングラデシュ人の奥ゆかしさに感動しているのだ。

これは感性の問題だと思う。エジプト人ともインド人とも違うバングラデシュ人は、比較において、日本人に近いのだと思う。だからかもしれない、バングラデシュの主食もカレーだが、バングラデシュで、それこそ朝昼晩、カレーを食べても、全然、大丈夫。バングラデシュのカレーは日本人の味覚の範疇にきっちり収まってくれるのである。あるときなど、バングラデシュ調査を終えて（もちろん、カレーを食べ続けて）、成田から上野まで戻ってきて、栄えある帰国後の初飯に、カレーをチョイスしてやったぜえ？ 野生的だろう？ いやいや、日本のカレーと食べ比べてやろうという余裕があっただけ。嗚呼、なんという、インドとの隔絶か！

そんなバングラデシュを、都合5回、私は訪れたことがある。え？ なんでバングラデシュになんぞ、行ったのかって？ 私はシガナイ高校教師、ソコントコロを愚痴ってもシカタガナイけれど、これでも一応、研究もしている。酔狂にも学生時代、考古学に心酔した私は、発掘現場に顔を出すうちに、出土する「土器」にハマってしまったのである。土器とは、粘土をこねて、焼いたもの。ただ、それだけ。とてもシンプルだから、逆にいえば、どこにでも、割とある。日本だと、縄文土器とか弥生土器っていうくらいだから、ほぼほぼ完全に過去の遺物だけれど、世界を見渡せば、結構チラホラ残っている（齋藤正憲『土器づくりからみた3つのアジア』、創成社新書）。バングラデシュにも土器は残っていて、そのつくり方を取材してやろうというのが、平たくいえば、私の研究テーマ。だから、土器づくりの取材をするために、バングラデシュに通ったのである。

陶工、医者になる。

たしか、2回目の調査だったと記憶している。首都ダッカ郊外のCという村を訪ねたときの話である。C村には、いまも土器を生産する陶工が暮らしているのだ。話がややこしくて申し訳ないが、イスラームの国であるバングラデシュにも、1割ほどのヒンドゥーが暮らしている。そして、ヒンドゥーには、カーストがある。肌の色の違いで身分が決まっているというアノ、差別的身分制度であるが、ポイントは意外なところに。見逃せないのは、職業によってカーストが定められているということ。あるカーストに生まれついた者は、その職業を世襲していく。変えるのは厄介。なんせ、選択肢そのものが、最初から、ありゃしない。どーしていいか、分かんないよなあ、そりゃあ。で、旧態依然。

念のために繰り返すが、バングラデシュでは、ヒンドゥーはマイノリティーであって、マジョリティーはイスラーム。イスラームにはカーストがないのだから、右にならえて、カーストなんてやめてしまえばいいのと思わずにはいられない。でも、やめない。律儀といえば聞こえはいいが、たぶん、発想がないのだろう。のどかな農村で質素に暮らすぶんには、とりたてて不満も覚えないのだ。

そして。土器をつくるのも、クマールと呼ばれる土器づくりカーストの仕事である。ほかのカーストは土器をつくらないので、いってみれば、一社独占。一攫千金は期待できないけれど、まあ、安定はしている。将来的にどうなるかは分からないけれど、とりあえず、いまのところ問題はない。だから、続けるし、続くのである。

C村にはクマールが集まって、土器をつくっている。土器生産は基本、世帯を単位とするが、20世帯ほどが、家族で粘土と格闘している。そうか、20軒か……。俄然、C村における土器づくりの全貌を把握したくなった私は、各世帯への聞き取り調査を敢行したのであった。

その過程で、である。私は、めっぽう興味深い事例に遭遇することとなった。その家では、年老いた陶工が、それこそ肩で息をしながら土器をつくっていた。後継者不在、風前の灯感満載の工房は少ないし、ここもそうかと思ったのだから、違った。立派な息子がいて、少し前までは土器をつくっていたのだ。でも、いまはいない。なんで？ 彼は、ナ、ナント、夢のお告げにしたがって、呪医になったというのだ！ は？ 呪医？ 呪医というのは、呪術によって治療行為を行なう、いわば宗教的職能者である。呪術とは、精霊の力を借りたり、あるいは悪霊をお祓いしたりすることで、ひとびとが抱える問題に対処する行為の総称。呪術師は英語だとマジシャン (magician) というから、胡散臭いと思ったら、ありゃしない。占いとこそ一ゆーのに懐疑的な私は、呪術には全然興味がなかったが、土器づくりに関わることなので、ついつい首を突っ込んでしまった。

「オイオイ、マジっすか？」と訝りつつ、彼の診療所(?)の所在を尋ね、訪ねてみたら、ホントにありました！ ひと羨む象牙の塔とはいかないが、簡素ながらも小奇麗で、清潔感のある建物が、ありました、ありました(写真1)。しかも、屋根架けしてある待合所の小さなベンチには、順番を待つひとびとの姿も！ 彼ら/彼女ら、どーみても、具合悪そう(写真2)。そんな患者さんが、列をなしている。そう、ここは、行列のできる診療所なのだ。

陶工、医者になる。



写真1 N氏の診療所



写真2 診療をまつ患者たち

診療所には看板が。看板冒頭には、いきなり、「狂人N」などと書かれている。Nとは呪医のイニシャルだが、自ら狂人と謳うたあ、一体全体、どーゆー神経してんだよと、ドン引きしてしまったが、これは、ベンガル語の問題。ベンガル語の「狂人」には、「超人」、「変人」の意味も含まれるのだとか。つまり、「ひととは違うことができませ！」というアピールであったのだ。

そんな狂人が、夢のお告げで誕生したことは、すでに述べた通り。N氏は現在50歳。結婚して、子どももいる。もともと陶工だったのだが、結婚後、夢をみて、呪医になったという。どんな夢だったのだろうと気になってしょうがないが、夢の内容については、頑なに口を閉ざす。ともかく、夢をみて、それにしがった。結婚して、家庭もあって、なかなかの一念発起であるが、どうやら、呪医の仕事は儲かるらしい。儲かるといってもタカが知れているかもしれないが、陶工の仕事よりはイイらしいのだ。事実、父親や周囲は彼が呪医へと華麗な転身(?)を遂げることに反対しなかったそうだ。呪医の仕事で得た収入で、診療所も建てたみたいだし。夢のお告げをきかっけに転職してしまう事実もさることながら、それを受け容れてしまうC村の包容力、ハンパねえ。N氏が文字通りの狂人というレッテルを貼られないのも、ひとえに、C村のひとびとの理解があつてこそ。このことは銘記されるべきだと思う。

さて、呪術の内容である。なんたって、夢のお告げで誕生した呪医。その施術たるや、さぞやオドロオドロしいのではあるまいかと、みたいような、みたくないような……。でも、まあ、実際に患者さんもいるし、診療を隠しているふうでもないし、大丈夫だろうと診察室を覗いたら——。拍子抜けしてしまうほど、フツーでした(写真3)。壁際に簡素な祭壇がしつらえてあるが、そこに羊の生首が鎮座しているなどというブツ飛んだ光景が目飛び込んでくるなんてこともなく、いたってフツー。傍に控える患者の眼前で、皿に小さな花卉をいくつか捧げ、水を振りかけながら、N氏はなにやらブツブツと唱えている。そう、ただ、祈っているだけ。数分の祈祷が済むと、おもむろに花卉を紙に包み、患者に手渡していたものの、これで、診療は終わり。へ？ 終わり？ 終わりである。

陶工、医者になる。

N氏は、生粋のヒンドゥー教徒。じゃあ、ヒンドゥーの教えと呪術は矛盾しないの？ 心配ご無用。彼は、ヒンドゥー教徒として、ヒンドゥーのしきたりに則った祈祷をしているだけなのである。っていうか、氏は夢をみて、そんで呪医になっちゃったもんだから、特別な修行なんぞ一切していない。だから、フツのこしかできない。で、患者さんもそれを求めているというわけ。

祈祷で病気が快復する。そこまで楽天的に考えているひとは、さすがに、ほとんどいないようだ。何人かの患者さんにも話を聞いたのだが、本当に困ったら、町の病院に行きたいというのが本音である。C村は首都ダッカからそんなに離れてはいない。しかし、バングラデシュは雨季の洪水が激しいお国柄。毎年、洪水のたびに道路網が寸断され、孤立してしまう農村も少なくなく、C村もその一つ。そんなとき、船やバスを乗り継げば、町まで出ることは可能。でも面倒臭いし、お金もかかるし。だから、本当にキツければ、万難を排し、万障を繰り合わせて、ちゃんとした病院にまで足を運ぶけれど、ちょっとした体調不良くらいなら、Nさんのところでいいんじゃないか、安いし、楽だし。気休め？ そう、ぶっちゃけ、気休めなんだけれど、村人も納得しているし、また、N氏もそんな村人の要望に応えた格好だ。双方合意のうえで、呪医が生まれ、また、その存在が許容されているのである。



写真3 N氏の施術風景

かくて、期せずして、呪医との邂逅を果たしたのだが、土器のことばかり考えてきたこの私。そもそも、呪医のなんたるかが、よく分かんないし……。よし、少し勉強してみよう。まずは、『呪術の人類学』（白川千尋・川田牧人編、人文書院）というウツェツケの本があったので、読んでみました。そこには、フィリピン、タイ、バリの呪医の事例が書いてあって、とても参考になった。

フィリピンでは、父親からその知識を受け継いだ女性の呪医が活動していた。彼女が薬草とともに利用するのは、ナ、ナント、虫の糞。虫の糞をお湯に溶いて、患者に飲ませるのである。……。なんかこう、そのものズバリ、「ザ・呪術」という感じだ。で、奇妙な診療行為を自信満々に繰り広げる彼女、実は、キリスト教徒であり（そのことを隠そうともしない！）、毎週日曜日の礼拝は欠かさないというから、開いた口がふさがらない。診療の途中で十字を切ってみたり、患者に教会に行くように指示したりするものの、施術そのものはあくまで呪術。イエス・キリストや聖母マリアに祈祷する、なあってことは一切ない。バングラデシュで私がみた呪医は、それこそ、ヒンドゥーの教えの枠内で施術するわけで、とても対照的だといえる。加えて、近代医療、つまりは普通の病院とも、うまく棲み分けている。恣意的だとはいえ、呪術で対応する病気と近代医療が治す病気は、明確に区別されている。実際、呪医の実兄が病院に入院したことについて、調査者

陶工、医者になる。

が「なんで、自分で治さないの？」とツッコんだところ、「それは、医者が治す病気だから」とうそぶいたとか。ご都合主義も、ここまで徹底していれば、立派、立派。脱帽するしかない。しかし、そうなのだ。フィリピンでは、呪医と、宗教・近代医療が、イイ感じで共存しているのだ。

タイは、ある意味、バングラデシュの事例に似ている。上座部仏教が卓越するココの呪術は、基本、仏教の教えの範疇で行なわれているようだ。聖水や聖糸を使うあたり、若干アヤしい部分もあるが、専門家（モータム）として独立する際には仏像の前で儀式を行なうし、呪文には上座部仏教のパーリ語経文が混入する。パーリ語なんて、アナタ、フツー、チンプンカンプンで、当の呪師すら意味が分からないことがほとんどだという。が、それでも、パーリ語なのであり、いわば、呪術と仏教が折衷した感じである。宗教から逸脱しないところはバングラデシュに似ているが、宗教と折衷するというあたり、おおいに趣きを変える。

タイには、薬草の知識に長けた専門家・薬草師もいるが、これがまた、面白い。モータムから独立した例も知られ、両者の根っこは一緒である。でも、薬草師は薬草の知識を吸収することに貪欲で、ほかの薬草師を訪ねるのはもちろんのこと、首都にある医療関連の研究所にまで足を運んで、薬草の知識を仕入れる者までいるという。先に紹介したフィリピンの事例でも、当該の呪医には親戚に医者・医療関係者がおり、ちょいちょい近代医学の知識を仕入れているフシがある。でも、獲得した知識が施術にアカラサマに反映されることは少ないようだから、タイの状況とは決定的に異なる。呪術と近代医学の関係は、さまざまであるようだ。

で、バリである。やや独特なバリ・ヒンドゥーではあるものの、バリ島住民の90%はヒンドゥー教徒である。だから、バングラデシュとの比較はおおいに気にかかるところ。で、バリの呪医もやはり、おおむね、ヒンドゥー教から乖離しない。バリ島民は、イルム（他者に厄災をもたらす悪い呪術）によって、病気が引き起こされると考える。ある呪医は、主として瞑想と呪文を駆使し、イルムに対抗し、ときに呪薬（油にさまざまな材料を入れ、呪文を唱えたもの）を利用するんだとか。イルムだとか、呪薬だとか、もう完全に呪術の世界であるが、その専門家がバリアン。バリ・ヒンドゥーの公的な部分は司祭によって取り仕切られるが、村人の個人的な問題を受けもつ、私的な宗教職能者がバリアンなのである。つまり、ヒンドゥーという体系のなかで、呪医はその役割を明確に与えられているのである。

さて、どうだろう？ 呪医についてちょっとかじっただけでも、モーレッツに気にかかるのは、呪術と宗教との関係である（表1）。結論からいえば、ヒンドゥー教を信仰するバングラデシュとバリでは、ヒンドゥーの枠組みから逸脱することなく、呪医の活動が完結しているようにみえる。ヒンドゥーと呪術の相性がいいのか、はたまた、ヒンドゥーがたぶんに呪術的なのか。もっともっと事例を集めなければならないけれど、そんな見通しが思い浮かぶのである。

一方で、タイとフィリピンは様子が違う。違うったら、違う。仏教（タイ）とキリスト教（フィリピン）という、呪術の対極にあるともいえる、カッコたる宗教がガッツリと根を張っている。その空隙を縫うように、呪術が残されているかのようだ。そんな「隙間産業」ともいえる呪術のあり

陶工、医者になる。

かたは、さらに、タイとフィリピンでもおおきく異なる。タイにおいて、パリー語の経文を利用するのはいいんだけど、それは、あくまで呪文として。意味不明という点では呪文らしくていいのかもしれないけれど、タイの呪師は仏教に権威づけを求め、仏教と同化しようとする意識が強いように見える。薬草師が新たな知識の獲得に熱心なのも、同じように理解していいと思う。

フィリピンでは、どうか？ キリスト教を呪術へと取り入れることも皆無ではないが、そんなに目立たない。呪医は独自の流儀で、患者に相對する。タイの状況を仏教と呪術の折衷とするなら、フィリピンでみられるのはキリスト教と呪術の共存である。もちろん、ちょいちょい、キリスト教の要素は混ざってくる。でも、タイほどにはアカラサマではない。近代医学との関係も、同じ（表1）。タイがなりふり構わず、積極的に知識を取り入れるのとは裏腹に、フィリピンでは医者にこっそり助言を求める。場合によっては、呪医が近代医学を勧めさえする。そう、何食わぬ顔をして。

表1 呪術と宗教・医療の関係

	バングラデシュ (ヒンドゥー)	タイ (仏教)	バリ (バリ・ヒンドゥー)	フィリピン (キリスト教)
宗教との関係	同一	折衷	同一	共存
医療との関係	分担	導入	分担	参照

私はかつて、アジアの諸文化に2つの類型を指摘したことがある（齋藤正憲『境界の発見』、近代文藝社）。インドや中国といった文化の中心・中核の近くにあつて、その影響が「洪水」のように押し寄せる地域の文化類型と、文化的な影響は受けるものの、それが「雨漏り」のようにおだやかな地域の文化類型である（cf. 丸山真男「原型・古層・執拗低音」、加藤周一ほか『日本文化のかくれた形』、岩波現代文庫、88-151頁）。前者のような地域では、外来と在地の「二者択一」が常に強いられよう。でも、文化の影響が激しく及ぼうとも、自国の伝統文化が唯々諾々と押し流されてしまうとは考えにくい。踏ん張るのだ。そして、熟慮のうえ、ひとたび選んだのなら、選択したものに固執するのも無理はない。場合によっては、ギリギリのところで、折衷にも落ち着く。私はこれを境界型とした。他方、後者における文化の影響なんて、のどかなもんだ。さまざまな文化が共存を許され、ひとびとはじっくり品定めし、イイトコ取りすればいい。そんな「取捨選択」を許されるのが辺境型だ。そんなふうに、私は考えた（齋藤正憲「境界／辺境論序説」、『教育と研究』32、1-21頁）。

境界／辺境論の視座から呪術を眺めると、何がみえてくるのか？ タイはインド・中国から地続きで、近い。だから、境界型である。仏教を選び、選んだからこそ、仏教に固執する。そんな状況を迎えた呪術は、仏教と折衷して生き延びる道を選んだ。また、「二者択一」を迫られるというのは、なんだか受け身のようであり、でも結局は自分で主体的に選ばざるを得ない。そんな積極的な姿勢が、近代医学とのポジティブな関わり方にも現れていると考えられるのである。

かたや、フィリピンは辺境。辺境ではさまざまな要素の共存が許されるのではなかったか。キリ

陶工、医者になる。

スト教も呪術もまた、共存を許され、だから実際、共存している。「取捨選択」を許されるのが悪いとは私も思わないが、逆にいえば、選ばなくてもいい。あるときには近代医療に頼り、別の場合には呪術に頼っても許される。なにせ、共存は、不干渉が前提だ。かような環境のなかに、フィリピンの呪医は身を置いているとすれば？ だからこそ、呪術とキリスト教は、お互いの存在を許容し、ほんやりと共存し得るのだ。フィリピンでは、境界型のタイとは対照的に、呪術をめぐる状況までが辺境型であった。

呪術というのはやはり、ひとびとの精神世界の深層に脈打つものだと思う。そんな前提で、仏教やイスラームなどの「高度宗教」を迎えたとき、ひとはさまざまな反応をみせるのだ。折衷を模索したり（境界型）、ほんやりと共存したり（辺境型）。そのありようが風土の桎梏から逃れられないことは、もはや議論の余地もあるまい。

で、やっぱり、バングラデシュとバリの事例、ヒンドゥーと呪術の関係についても言及せねばなるまい。ともに、ヒンドゥー教の枠組みのなかで呪術が行なわれ、ヒンドゥーとは未分化である点では一緒だと思う。差が出てくるのは、近代医療との関わり、距離感であろう。バリでは、そもそも、呪医が伝統医療の一角を占めており、そのことは公的にも認められている。だからそこでは、呪医と近代医学は根本的に別物となる。そもそも、呪医が近代医療の知識を仕入れるという雰囲気じゃあ、ない。かたや、バングラデシュでは、すでに紹介したように、ひとびとは呪医の存在を許容しつつも、ナンダカンダ、最後には近代医療を頼る。劣悪な交通事情の農村で、近代医療のスキマを補う。それが、呪医であり、公的な位置づけはアヤフヤなまま。それで、いいのだ。

と、ここで、とある本（佐々木宏幹『シャーマニズム』、中公新書）を読んでみたら、面白いことが書かれていた。祭司とシャーマン（憑霊状態になる宗教職能者のことだが、広義には呪術師となる）の区別である。医療行為を担うシャーマンもいるというから、呪医の話をするときに、参照してもよさそうだ。で、同書で紹介されている研究によれば、呪術 - 宗教的職能者は祭司とシャーマンに分けることができる。祭司の領分では、普遍的な神々が信仰され、サンスクリット原典が重んじられる。社会体系の維持や長期的な福利が追究され、定期的な儀礼が優勢である。祭司は上層カーストによって世襲され、専門家と見做される。一方、シャーマンのほうは、地域的な神々や伝承がベースとなる。個人的な問題に対応し、特別の儀礼が卓越するという。比較的下層のカーストに属する者が獲得する役職であり、必ずしも、世襲されるものではないらしい。そして、「文明の中心から遠く離れた地域に住む無文字民族ほど祭司とシャーマンの分化の程度が低く、逆に文明度の高い有文字社会ほどその分化の程度が高」という（146頁）。

なるほど、なるほど。いわば都市部で祭司と呪術師（シャーマン）の分化が明瞭だということは、両者の役割分担も仔細に定まっているのだろう。バリの事例は、そのように解される。他方、都市部から一定の距離を置くC村のような農村部では、祭司と呪術師の棲み分けがキッチリ定まってはいない。だから、呪医としての能力は、世襲ではなく、夢見によって獲得された。C村だからこそ、N氏なのだ。

陶工、医者になる。

最後に、関連するはなしを、もうひとつだけ。

岩田慶治は呪術のありかたが、山地と平地で違うことを強調する（『草木虫魚の人類学』、講談社学術文庫）。すなわち、山地ではひとびとは「カミ」と直接、対面したが、平地では「社会的に承認された宗教的職能者」が発生するようになるという（204-205頁）。前者においてひとと「カミ」の関係は自由であるのに対し、後者では「カミ」は「家畜化」されているという（236-237頁）。本来、個人の裁量に任されていた自由な「カミ」との対話は、社会の複雑化に歩調を合わせて、整理され、形式化されて、ついには専門家の介入を仰ぐようになる。すると、皮肉なことに、宗教が高度化されていくのとは裏腹に、制約が増え、不自由になっていく。岩田は、一見未開に見える呪術やアニミズムにこそ、精神の自由を汲み取っているのである。

夢見によって呪術師になったN氏は、存在そのものが、きわめて個人的だ。将来的に、息子、孫へと継承されていけばまだしも、現時点では専門家とはとても呼べない。そう、N氏はどこまでも自由なのであって、岩田慶治の言説に拠るのなら、呪術のルーツにも位置づけられるのだ。

N氏は夢をみて、「カミ」との自由な対面に及んだ。N氏の呪術はだから、ひとの心理の奥底に眠る、たいへんに根源的な営為ともいえる。そして、それを揺籃したC村。首都からでも全然、日帰りできちゃう近場で、呪医のいる風景に出会えるバングラデシュ。そんな景色をみせてくれたバングラデシュ、C村、N氏には、感謝の言葉しかみつからない。

でも――。

それでも私は、人間文化の深淵の、その縁に、ようやく立ったに過ぎないのだろう。アジアを訪ね歩いてきた私の夢は、ただ一つ。さまざまな文化との、「自由な対話」である。そのためにみるべき夢があるのなら、みてみたいものだ。